

# 新書紹介

日本のサラリーマン 国際比較でみる

千石保編著

NHKブックス B6版 二二八頁 七〇〇円

「最近の若い者の考えはどうもよくわからない」。よく言われる言葉であり、そう言っている日本人も、昔は同じことをいわれてきたらしい。でありながら、この世の中は結構スムーズに動いてきたし、チャンと役割交替、世代交替がなされてきた。ところが最近少しさまがわりしているようだ。考えかたや価値観が年齢とともに変化し、肩書きに応じて望ましいと思われる役割をはたしていく、というパターンの変化が、今の若い者にも、はたして本当におきるのか、どうも疑問だ、という心配である。なぜか。

日本人は「和」ということをいう。仕事は人と人とのつながりで行われていく面が強く、事

では、フォーマルな関係より、むしろインフォーマルな関係の方が大切とさえいえる。

実、身の回りをみてもその感がつよい。昨今の日本型経営がうまくいっている、とまではやされていいる最大の理由が、この人間関係重視の経営理念によるといわれている。

人間関係といっても、同期、同じ大学出身等、さまざまなものがあるが、自発性、ヤル気等に一番大きくひびくのは何といっても職場でのそれである。まだまだ転職は転落を意味すること大、である現状では、職場の人間関係がもつ意味あいは非常に大きい。この職場での人間関係を親密なものにしていくためには何が必要か。フォーマルな組織関係ではむろんあり得ず、インフォーマルな関係がその役割をはたす。その意味で、日本

は、フォーマルな関係より、むしろインフォーマルな関係の方が大切とさえいえる。

ところが最近の若者は、この職場でのインフォーマルな関係をもちたがらない。職場は契約に基き、与えられた仕事をこなすところである。義務だから命じられたことはするし、残業もやる。しかし、自発的な残業はしない。拘束時間が過ぎればそれ以上つきあう義務はない、ということである。まさしく西欧型の価値観といえる。従来型の良きにつけ悪しきにつけ、愛憎を共にするような職場中心の生きかたとは無縁になる。そして、自発性、ヤル気は著しく低くなる（命令されればやる、のだから自発性は低くなるし、ヤル気も何らかの刺激―例えば経済的な―がなければおきない）。はたしてこれで、というわけである。

著者は、だから良くない、といっているわけではない。この本では従来から経験的に言われてきたものを、二つの意識調査を通して、数字的にのべているわけである。その結果は、やっ

1を分類しており、そのなかで地方公務員を一つのタイプとして出している。O・Iもこのタイプに入る、とのことであり、非常に厳しい見方(?)をして

は、会社は、やはりこうか、という感じである。前記の若者の考え方(とその背景にあるもの)、仕事の進みかた(人間関係で動いていく)、昇進に対する態度(日・米の違い)、大学には何を期待していくのか、等々が調査結果から述べられている。その背景として日本人は会社に対し愛憎ともにかかわるため、やる気も、そして深刻な疎外感・孤独感・不平不満も非常に高くするのだ、という指摘は、まさにそのとおり、といったくなっていく。日本的な考えかた、仕事の遂行の仕方、価値観、若者の考え方などを知り、考えるのに有益であり、非常に

おもしろい。著者も前書きで述べているように、感覚的にはわかっていたようなことを数字で裏づけるとともに、オヤツと思わせる事実もでてくる。「今どきの若いヤツは一体何を考えているのか」と思う人は、ぜひ一読されるとよいと思う。

またこの本ではホワイトカラー

〈都市科学研究室主査

富永 修